

『タズキラ・イ・ホージャガン』 日本語訳注 (8)

澤 田 稔

富山大学人文学部紀要第 68 号抜刷

2018年2月

『タズキラ・イ・ホージャガーン』日本語訳注 (8)

澤 田 稔

はじめに

本訳注は『富山大学人文学部紀要』第67号(2017年8月)掲載の「『タズキラ・イ・ホージャガーン』日本語訳注(7)」の続編であり、日本語訳する範囲は底本(D126写本)のp.200/fol.100bの1行目からp.219/fol.110a(写本の最終)までである。

ヤルカンドに拠るイスハーク派(黒山党)の勢力がアーファーク派(白山党)のホージャ・ブルハーン・アッディーンの軍勢に最終的に敗北して壊滅した経緯は、清朝史料では全く知ることはできないが、本書『タズキラ・イ・ホージャガーン』では詳しく述べられている¹⁾。このイスハーク派勢力の最終的敗退の時期は『タズキラ・イ・ホージャガーン』に示されていないが、1755年の終わりか1756年の初頭と考えられる²⁾。当時ホージャ・ブルハーン・アッディーンの側に付いていた策謀家、ホージャ・スィー・ベグ(ホジスベク、霍集斯)が清朝に帰服後に供述したところによると、「2ヶ月余り囲んでヤルカンドを得た」という³⁾。そして、『タズキラ・イ・ホージャガーン』はイスハーク派ホージャたちの悲惨な敗走状態を描くなかで、その叙述を終えている。それは、同派ホージャたちの事績を主題とする本書として当然の処置とも考えられるけれども、イスハーク派の消滅がヤルカンド、カシュガルなどのムスリム住民にとって

-
- 1) 佐口透『18-19世紀東トルキスタン社会史研究』東京：吉川弘文館，1963年，601頁，注162参照。
 - 2) 佐口透「東トルキスタン封建社会史序説：ホジャ時代の一考察」『歴史学研究』第134号，1948年，7頁，佐口透『18-19世紀東トルキスタン社会史研究』45頁。
 - 3) 小沼孝博「在京ウイグル人の供述からみた18世紀中葉カシュガリア社会の政治的変動」『満族史研究』第1号，2002年，50頁。なお，1837/38年頃に作成された『ターリーヒ・ラシーディー』テュルク語訳附編によれば，イスハーク派のホージャ・アブド・アッラーたちはホージャ・ブルハーン・アッディーンとヤルカンドにおいて9ヶ月間戦って敗北したという(ジャリロフ・アマンベク，河原弥生，澤田稔，新免康，堀直『『ターリーヒ・ラシーディー』テュルク語訳附編の研究』NIHUプログラム「イスラーム地域研究」東京大学拠点，2008年，テキスト401a，日本語訳165頁)が，『タズキラ・イ・ホージャガーン』の叙述内容からみても，ヤルカンドでの戦いが9ヶ月の長期にわたって繰り返されたとは思われない。

大きな時代の終焉、あるいは転換点であるとみなされたのかもしれない⁴⁾。

日本語訳注

【p.200/ fol. 100b】物語の章。ガーズィー〔・ベグ〕⁵⁾について〔聞かなければならない〕⁶⁾。

この夜、王子たちは城市を捨て避難した。ペテン師のガーズィーは知らせを得て、命じて喜びの太鼓をたたかせた。通りから通りへと、「時代は〔シナ〕⁷⁾ 皇帝、アムルサナー、ホージャ・ブルハーン・アッディーン・ホージャムの時代に」と触れまわらせた。その後、息子に贈り物を持たせ、そのホージャのもとに送った。書状も送った。すなわち、「私はこのホージャたちの軍を負かして混乱させ、城市から出した。そなたたちは速やかに、後ろから軍を送り、〔ホージャたちを〕連れて来るように。すこしでも反対のことになれば、〔ホージャたちは〕堅固な場所に入る。その時に〔後悔しても〕⁸⁾ 無益である。彼らのうち一人が逃れて行くなれば、〔そなたたちが〕この城市に無事にいることはできない。かれら自身は⁹⁾〔すべき〕残された仕事をよく知る」と。

さて、ホージャ・ブルハーン・アッディーン・ホージャムはこの言葉を聞き、全ての騎兵随員 (ḥayl ḥašam) たちを呼び出して出来事を説明し、ラフマーン・クリ・ベグ (Raḥmān Qulī Beg) を長にしてフダー・ヤール・ベグ (Ḥudā Yār Beg) を、クルグズのアブド・アッラー・ベグ (Qūrġiz‘AbdAllāhBeg) を、〔サリグ・ヤサーウルを〕¹⁰⁾、クルグズたちからムンキ・ビヤ (Mūnkī Biya) を、五百の兵とともに、「そなたたちは速やかに行って途上をさえぎり、襲撃¹¹⁾して連

4) カシュガリア (タリム盆地) が最終的に清朝に服属したのは、アーファーク派のホージャ・ブルハーン・アッディーン (大ホージャ)、ホージャ・ジャハーン (小ホージャ) 兄弟の清朝に対する反乱が鎮圧された 1759 年のことである。しかし小沼孝博氏は、イスハーク派に対するアーファーク派勢力の勝利 (1755 年末～1756 年初頭) をもってカシュガリアが清朝に帰順したという認識が、上述のホージャ・スィー・ベグと 20 世紀初頭に『ターリーヒ・アムニーヤ』著したウイグル人歴史家ムッラー・ムーサーに共通して見られることを指摘している (『在京ウイグル人の供述からみた 18 世紀中葉カシュガリア社会の政治的変動』51-52 頁)。これは、当該住民の歴史観を探る上で重要な指摘である。

5) Beg。Or. 9660, fol. 114a による補遺。なお、ガーズィー・ベグはヤルカンドのハーキム (都市長官または行政長官) である (本書 [p. 66/ fol. 33b]「日本語訳注 (3)」45 頁, [p.88/ fol. 44b]「日本語訳注 (4)」90 頁, [p. 166/ fol. 83b]「日本語訳注 (7)」34 頁)。

6) iṣitmāk kerāk。Or. 9660, fol. 114a; Or. 9662, fol. 131a による補遺。

7) Čīm。Or. 9660, fol. 114a による補遺。

8) fašīmān。Or. 9660, fol. 114a; Or. 9662, fol. 131a による補遺。

9) özlāri。D126 は AVZLARYNY と綴るが、Or. 9660, fol. 114a; Or. 9662, fol. 131a の AVZLARY による。

10) Sarīg Yasāvulnī。Or. 9660, fol. 114a; Cf. Or. 9662, fol. 131a による補遺。

11) yasar。D126 は YSYR と綴るが、Or. 9660, fol. 114b の YSR による。

れて来るように。そなたたちは決して同情しないように」と命じて出発させた。この者たちはこの意図をもって出発した。

さて、ニヤーズ・ベグ・イシク・アガはオルダ（宮殿）のなかで拘束されていたが、王子たちがオルダから出たのにともない¹²⁾、拘束から脱し、オルダの全ての調度 (sar-u-kār) を集めて取った。【p.201/ fol. 101a】アーイシャ・ベグ¹³⁾〔の〕も集めて取った¹⁴⁾。残った物をガーズイー・ベグが取った。城市の人びと〔のなかで〕も、早く知らせを得た者が世間に満ち溢れた。

さて、王子たちの後方から進んだクルグズたちは急いで進み、日の出の時に王子たちの背後からやって来た。さて、この平信徒の一門たち (muhibb¹⁵⁾ ḥānadānlar) は寒さに凍えて、ある者たちは水に飛び込んでふるえ、ある者たちは腕に子供をかかえ (tutuqluq), ある者たちは家族の人びととともに馬に相乗りし¹⁶⁾、またある者たちは徒歩で馬を引いている¹⁷⁾。まさにこの混乱した状態において敵は四方をすっかり取り囲んだ。王子たちとともに千に近い人が〔城市から〕出ていた。ある者たちは道に迷い、またある者たちに災難が生じて、来られないで後ろに残っており、四、五百に近い人が残っていた。しかし、敵に対峙する力はない。

ただし、かの勇敢なる仕事の獅子、大志をいただいた闘士、すなわち、ホージャ・アブド・アッラー・ホージャム¹⁸⁾の熱情が沸き立った。幾人かの勇者を同行させ、敵たちと闘った。しかし、この者たち以外の者は自分の状況に煩わされていた。敵たちのほうに振り向くのは不可能である。さらに、ホージャ・ジャハーン・ホージャム猊下に、シャリーファ・アガチャ (Šarīfa

12) çiqmaq birlä. D126 は çiqışları と記すが、Or. 9660, fol. 114b; Or. 9662, fol. 131b による。

13) アーイシャ・ベグ (またはアーイシャ・ベギム) はニヤーズ・ベグの娘で、イスハーク派のホージャ・ジャハーンに嫁いでいた (本書 【p.164/ fol. 82b】「日本語訳注 (6)」81 頁, 【p. 179/ fol. 90a】「日本語訳注 (7)」44 頁)。

14) D126 は ‘Äyša Beg ham yiqip aldı, Or. 9660, fol. 114b は ‘Äyša Ḥanımın sar-u-kārini tārāj äylädi, Or. 9662, fol. 131b は ‘Äyša Begniñ ham öy sar-anjämini aldı と記す。なお、アーイシャ・ベグはニヤーズ・ベグの娘で、ホージャ・ジャハーンは彼女を娶っていた (本書 【p. 164/ fol. 82b】「日本語訳注 (6)」81 頁, 本書 【p. 179/ fol. 90a】「日本語訳注 (7)」44 頁)。

15) muhibb はスーフイズムなどにおいて「居士、平信徒」を意味する (東長靖 (編著) 『スーフイズム・タリーカ・聖者信仰用語集ローマ字順配列』京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科附属イスラーム地域研究センター (KIAS), 2011 年, 43 頁)。

16) mingäšiglik. D126 は MNKAŠLYK と綴るが、Or. 9660, fol. 114b の MNKAŠYKLYK, Or. 9662, fol. 131b の MYNKAŠYKLYK による。

17) yötäläglik. D126 は BVTHLYK と綴るが、Or. 9660, fol. 114b の YVTALAKLYK, Or. 9662, fol. 131b の YVTH LK LYK による。

18) ホージャ・アブド・アッラーはホージャ・ジャハーンの子ホージャ・ユースフの息子である (本書 【pp. 64-65/ fol. 32b-33a】「日本語訳注 (3)」43 頁, 【p. 69/ fol. 35a】「日本語訳注 (3)」48 頁, 【pp.119-120/ fol. 60a-b】「日本語訳注 (5)」31-32 頁)。

Ağaça) という名の夫人 (haram) がいた。[ホージャ・ジャハーンは] すべての¹⁹⁾ 妻たち²⁰⁾ のなかで、この方に「最も」**[p.202/ fol. 101b]** 優しかった。いつも、私的な生活 (ḥalwat-i ḥāṣṣ) はこの方と一緒にであった。惚れこんでいた。偶然に、腹の痛みがきて、城市に置いて出ていくことができなかった。仕方なく、連れて出ていっていた。途上で夜になり、急いで知らせを得ることができなかった。シャリーフ・アガチャはある所に到ったとき、「ああ！ああ！」と叫んだ。馬から下りて、出産のために坐っている。食べ物を供する見張り人 (mu'akkil pāsbān) たちの一人が、この方の馬に乗り、見捨てて逃げている。いかに号泣しても、誰にも知らせを得る力は「なく」²¹⁾、そこに留まった。後ろから敵たちが来ている。王子たちは先に進んでいた。

さて、ホージャ・アブド・アッラー・ホージャムは自分の家僕 (ḥādim) とともに、これほどの敵に対し決然として (fayṣal berip), どの方向から襲撃されても、その方向に勇敢さを示し、その射た矢は決して外れないでいた。まさにこのような状態で午後の礼拝〔の時間〕となった。戦いながら進んでいた。突然、彼らの前にまた河が現れた。敵たちは先に行き、容易な場所から渡って遮り、鉄砲を撃つ態勢であった。この平信徒〔の一門〕たち²²⁾ は仕方なく〔河に〕²³⁾ 突っ込んだ。その先頭が河に入った。その後ろはまだ河に向って行っていた。敵たちはまた襲撃し始めた。これを見て、アディール・シャー・ダルハン ('Adīl Šāh Darḥān) の息子イスマーイール・ベグ (Ismā'īl Beg) はホージャムの **[p. 203/ fol. 102a]** 小姓 (uṣāq) の出であったが、人びとの一団を率いて敵たちに加わった。これを見て、ムスリムたちの気力が失せ、敵たちが元気づいた。彼らはまた馬を駆けさせた。ホージャ・アブド・アッラー・ホージャムはその前に出た。敵たちも避けないうで、拒まず来ていた。[ホージャ・アブド・アッラーは], ある名高いタグリク (「山地民」) の・・・²⁴⁾ に当たり、さらに・・・²⁵⁾ から突き抜け、飛んで地面に貼りつくほど一本の矢²⁶⁾ を射た。これを見て、敵たちの正気が失せた。皆が後退した。しかし、この汚らしい者の手で幾人かのムスリムが殉教に達していた。王子たちに関して馬鹿げた言葉語を語っていた。

さて、アブド・アッラー・ホージャムは駿馬を駆ってやって来て、この汚らしい者の馬の手綱を取って家僕にゆだね、手を下してその頭から胃を取り、手斧で切っていた。斧が貼りつ

19) hama. D126 は HM と綴るが, Or. 9660, fol. 115a; Or. 9662, fol. 132a の HMH による。

20) azwāj. D126 は AVAZ と綴るが, Or. 9660, fol. 115a; Or. 9662, fol. 132a の AZVAJ による。

21) yoq. Or. 9660, fol. 115b; Or. 9662, fol. 132b による補遺。

22) D126 は muḥibblar と記すが, Or. 9660, fol. 115b-116a; Or. 9662, fol. 133a の muḥibb ḥānadānlar による。

23) daryāga. Or. 9660, fol. 116a; Or. 9662, fol. 133a による補遺。

24) JRANH. 読みと意味を解し得ない。甲冑の一種と思われる。

25) JRANH. 読みと意味を解し得ない。

26) bir oq. D126 は YRAQ と綴るが, Or. 9660, fol. 116a; Or. 9662, fol. 133a の BRAVQ による。

いた。引きずり、また、この無地の戦闘用外衣 (düz olfaq²⁷⁾) の上に毛皮外套 (juba) を着け、…²⁸⁾ [の] 小さな節²⁹⁾をつないでいたらしいのが見られた。結局、鎖かたびら (zirih) が切られて、地面に落ちた。ムスリムたちは引きずり、死体を水に投げ入れた。

さて、ムスリムたちは三つの部分に分けられた。一つの部分は河を渡った。一つの部分は河のなかに、一つの部分は河のこちらの方面 (岸) に³⁰⁾。ホージャ・アブド・アッラー・ホージャムは次のように叫び続けている。すなわち、「そなたが益荒男であるならば、ひとり来たれ。【p. 204/ fol. 102b】カーフィル (不信仰者) たちから逃げるな。自ら矢面に立ってやれ。そなたはこの汚らしい者たちから逃げて、殺される。生きてまま手中に落ち苛まれて死ぬよりも、戦って死ぬほうがよい」と叫んでいる。誰の耳にも[その]言葉は全く入らないでいる。むしろ、各々は自分の生命に心配し、他の者の事にかかわらない。何とかして自ら先に進み、敵から遠くにいる。なぜならば、この者たちは家族の人びととともに出てきたから。いかほど速く進んでも、敵たちの進行よりも遅い。なぜならば、彼ら [敵たち] は空荷の馬で道の容易なところを進んでいるから。この者たちが一度に攻撃するならば、敵たちに一回、二回勝利する。しかし、その力はない。ホージャ・アブド・アッラー・ホージャムは、どれほどの勇者であろうとも、千 [人]、百 [人] に対抗できない。[敵たちは] 一方面を決めて逃げさせても、もう一方に死者を積み上げている。

詩

蟻たちが同盟すれば

猛々しいライオンの皮を剥ぐ

27) olfaq. D126 は AVLGAQ と綴るが、Or. 9660, fol. 116b; Or. 9662, fol. 133b の AVLFAQ による。A グループ写本 (Turk d. 20, fol. 153a; D191, fol. 165a; ms. 3357, fol. 221a) は AVLPAĞ と綴る。olfaq を olpaq の訛りとみなす。ラドロフの辞書によると、タランチ方言の olpak、カラ・キルギズ方言の olpok には「よろい、胸甲」(der Panzer) の意味がある (Wilhelm Radloff, *Versuch eines Wörterbuches der Türk-Dialecte*, Mit einem Vorwort von Omeljan Pritsak, 's-Gravenhage: Mouton & Co, 1960, vol. 1, p. 1096)。また、クルグズ語の辞書によると、olpok は「(甲冑の代わりになったり、その上に着けられる) 羊毛や綿の厚い層のついた一種の戦闘用の外衣」である (K. K. Yudakhin, *Kirgizsko-Russkii slovar'*, Moskva: Sovetskaya Entsiklopediya, 1965, p. 566)。

28) JРАНН. 読みと意味を解し得ない。

29) baldämčä < BLDMJH. なお、baldamci (<BL DM JY) という語が『五体清文鑑』にあり、「鴈翅」と漢訳され、「鎧 (よろい) の肩当ての後側近くに釘付けした三個の金具」との釈義がある (『五体清文鑑』I, 民族出版社, 1957年, 1038頁, 田村實造, 今西春秋, 佐藤長 (編纂)『五體清文鑑譯解』上巻, 京都大学文学部内陸アジア研究所, 1966年, 224頁, No. 3921)。

30) D126 は bu yüzdä, Or. 9660, fol. 116b は bu yanıda, Or. 9662, fol. 133b は bu labidä と記す。

要するに、ホージャ・アブド・アッラー猊下はたくさん叫んで〔も〕、誰も耳に入れなかった。その後、憤慨して河に入った。敵たちはこれを見て、水辺にいたムスリムたちを攻めた。ユーسف・ホージャム・パーディシャー猊下の年少の息子は **[p. 205/ fol. 103a]** エルケ・ホージャム (Ārkā Hōjam) という名であったが、この王子たちもまだ河岸にいた。カーフィルたちの一人が来て、突っ込んだ。飛ばせた。王子はひっくり返って馬から落ち、殉教した。これを見て、ムスリムたちは河に飛び込んだ。これを見て、ホージャム・ナザル・ホージャ (Hōjam Nazar Hōja) は、エルケ・ホージャムが殉教したのを見て、目の前が真っ暗になった。〔ホージャム・ナザル・ホージャは〕描写にたえないほど戦った。そして、いくらか行なったことは効果がない。なぜならば、敵たちは多くて、カルマク、クルグズ、タグリク、地元民 (yerlik) であり、選ばれて来たらしい。仕方なくホージャム・ナザル・ホージャは手を差し出し、エルケ・ホージャムの遺体を馬の前にまっすぐ取って進んだ。敵たちはまた攻撃してきた。この状況において、「河を渡ることはできない。〔遺体を〕下ろす、上げる所は滑りやすい氷で、その高さは一尋 (gulač) ある。〔遺体が〕敵の足元に取り残されるのは、水のなかに取り残されるより良いとはいえ」と考え、再び〔遺体を〕地面に置き、〔馬を〕跳ばせて河に入った。ところで、ホージャ・アブド・アッラー・ホージャムは河のなかにいた。弟の遺体に目がとまった。一度見た。二度と見なかった。なぜならば、事態が切迫しているから。

さて、これほどの人びとが河に入っていた。河の水が後方で溢れた。溢れ溢れ、**[p. 206/ fol. 103b]**大きくなってきて、ムスリムたちを押し上げていた。叫び声³¹⁾があがった。溺れてしまった。多くの者が殉教した。若干の者は河の岸において無事であった。

さて、ホージャム・ナザル・ホージャムは河のなかを進んで行っていた。一人の熱狂的なカーフィルが来て突いた。二つの鎖かたびら、一つの戦闘用外衣³²⁾を着けていた。槍が通らなかった。両足を鎧にかけ、力いっぱい馬にしっかりと乗っていた。二十、三十歩、地面を進んでいた。倒れなかった。二方向にいたタグリクたちが見て、賞賛して、一人の困惑した者 (mukaddar) が来て、真っ直ぐ近くに突っ込んだ。〔ホージャム・ナザルは〕仕方なく、水に倒れこんだ。四十、五十歩、地面を水に流されて行った。河のへりが人の身長の高さで、二つの鎖かたびら、一つの戦闘用外衣³³⁾の装備のまま水から出ることはできない。この状況においてホージャ・

31) garīv. D126 は GRV と綴るが、Or. 9660, fol. 117b の ĠRYV による。

32) olfaq. D126 は AVLGAQ と綴るが、Or. 9660, fol. 117b; Or. 9662, fol. 135a の AVLFAQ による。

33) olfaq. D126 は AVLGAQ と綴るが、Or. 9660, fol. 118a の AVLFAQ による。

アブド・アッラー・ホージャムが戻って行き、弓いれ³⁴⁾ から弓を〔取りだし〕³⁵⁾ 差しのべた。弓の先端をつかみ、もう一方の先端によって引きあげ、衣服を脱がせ、自分の毛皮外套³⁶⁾ を着せた。

全てのムスリムのうち生き残った者たちは河のあちら側に渡って下馬した。ある者の子はおらず、〔ある者の父はおらず〕³⁷⁾、ある者の兄はおらず、〔ある者の弟はおらず〕³⁸⁾、同様に³⁹⁾ エルケ・ホージャムもいないのを見た。皆は哀悼して泣いた。この状況においてホージャ・アブド・アッラー・ホージャムは怒りを込めて、偉大な人たち⁴⁰⁾ を **[p. 207/ fol. 104a]** 次のように畏怖せしめた。すなわち、「おお、無知な者たちよ、何故に、号泣しているのか。〔事態が〕これ以上大きくなれば、そなたたちはその時、何をするのか。そなたたち自身が死ぬならば、そなたたちはどのようにするのか」と。

詩

そなた自身に哀悼せよ、そなたは罪深くなる
罪を犯さずに赤子が死ぬことに何の嘆きがある

その後、アブド・アッラー・ホージャムは次のように叫んだ。すなわち、「この敵の手に生きたまま落ちる者は誰でも、『私は生き残る』と思わないだろう。罰して⁴¹⁾、卑しく⁴²⁾〔みじめに〕⁴³⁾に殺す。それよりも、戦って、そなた自身が矢面に立ってやり、名声とともに易々と死ぬのが良い」と布告している。誰もが自分の状況に患っている。カーフィルたちのほうから幾人かのペテン師たちが講和する準備をし始めている。すなわち、「おお、ムスリムたちよ、今、

34) qirbān. D126; Or. 9660, fol. 118a は QVRBAN と綴るが、A グループ写本 (Turk d. 20, fol. 155a; D191, fol. 167a; ms. 3357, fol. 222b) の QRBAN による。qirbān には a case for a bow の意味がある (F. Steingass, *A Comprehensive Persian-English Dictionary*, London & New York: Routledge, Eighth Impression, 1988, p. 963)。

35) alīp. Or. 9660, fol. 118a; Or. 9662, fol. 135a による補遺。

36) juba. D126; Or. 9662, fol. 135a は JVBA. Or. 9660, fol. 118a は JBH と綴る。

37) biriniḡ atasī yoq. Or. 9660, fol. 118a による補遺。

38) biriniḡ inisi yoq. Or. 9660, fol. 118a による補遺。

39) D126 は ‘alā hāzā と記すが、Or. 9660, fol. 118a; Or. 9662, fol. 135a の ‘alā hāzā al-qiyās による。

40) ‘aẓīmlar. D126 は ‘ZMLAR と綴るが、Or. 9660, fol. 118a の ‘ZYMLAR による。「偉大な人たち」とは王子たち (ホージャたち) を指しているのであろうか。本書後述の **[p. 211]** にも「偉大な人たち」との表現があり、ホージャたちの一部を示している。

41) qīnap. D126 は QYNAQ と綴るが、Or. 9660, fol. 118b; Or. 9662, fol. 135b の QYNAB による。

42) ḡvārlīq. D126 は ḡHARLYQ と綴るが、Or. 9660, fol. 118b の ḡHVARLYQ による。以下、この語の異同について注記しない。

43) zārliq. Or. 9660, fol. 118b; Or. 9662, fol. 135b による補遺。

何と言って、そなたたち自身にとって厳しいことを引き受けているのか。無駄な苦勞をして、そなたたち自身を虐げている。今や、この深みから脱しろ。運命に同意せよ。この二人のホージャたちが一つの河の水から離れる時、なんら異議もない。どのようにホージャムが選択しようと、そのようになる。もし、気高い両聖都への意向があるならば、旅の糧食と乗用動物を用意し、ヒンドゥースターンの境にいたるまで敬意、尊重を **[p. 208/ fol. 104b]** 込めて送っていき、戻ってくる。もし、この地域を選択するならば、どの城市に居住していても、そこにとどまると言って、王子たちの憤慨⁴⁴⁾、怒りをおさめて、この講和をおこなうように。もし、信用しないならば、『私がクルアーンの誓い』』と言って、ラフマーン・クリ、クルグズのアブド・アッラー・ベグ、サリグ・ヤサーウル、この三人の首領がクルアーンにより誓いをした。[このように講和の仕事をした。ムハンマド・アブド・アッラー・ブカーウル、シハープ・アッディーン・ブカーウル、ミルザー・アブド・アルワッハープ、この者たちはホージャ・ジャハーン・ホージャム猊下の御前に来て、上申した]⁴⁵⁾。全ての王子たちが集まり、これ以外に方策はないと言って、運命に同意した。

さて、アブド・アッラー・ホージャムの憤慨、怒りはしづまらなかった。次のように言っていた⁴⁶⁾。すなわち、「おお、神よ、そなたがこの最も卑賤で罪のある奴僕（小生）に一つの矢を授けるならば、私がそれにより我が生命を諸魂の受領者（死の天使）に委ねるならば、この圧制者に遭遇して卑しくみじめに死ぬことを、そなたが運命づけなければ、どうなるであろうか」と言って、頭をむき出しにして、一つの飛び抜けるような矢⁴⁷⁾が眼に刺さる⁴⁸⁾ほど激しく戦った。

さて、ホージャ・ジャハーン・ホージャム猊下は、「おお、我が子たちよ、今や、深みから脱しろ。運命に同意せよ。我々にとって、この殉教の階は我々の遺産である」と、多く忠告した。それから、ホージャ・アブド・アッラー・ホージャムが次のように言った。すなわち、「おお、偉大な父よ⁴⁹⁾、我々に退去の許可⁵⁰⁾を出させよ。我々の幾人かは世間の結びつきを捨て、孤立

44) ḥašm. D126 は ḤŠM と綴るが、Or. 9660, fol. 119a; Or. 9662, fol. 136a の ḤŠM による。

45) bu ʔarīqalīk šulḥ iṣīni qīldīlar. Muḥammad ‘Abd Allāh Bukāvil, Šihāb al-Dīn Bukāvil, Mirzā‘Abd al-Wahhāb, bular Ḥaḍrat-i Ḥvāja Jahān Ḥvājamnīn ḥuḍūrlarīga kirip ‘arḍ āylādīlar. Or. 9660, fol. 119a; Cf. Or. 9662, fol. 136a による補遺。

46) der erdīlar. D126 は der aydīlar と記すが、Or. 9660, fol. 119a; Or. 9662, fol. 136a による。

47) bir parrān ötkü dek oq. D126 は bir parrān oq ötkü dek oq と記すが、Or. 9660, fol. 119b; Or. 9662, fol. 136b による。

48) közlārgā ʔūṭiyā boldī. 「刺さる」の訳語は確実ではない。

49) āy bābā-yī buzurgvār. なお実際には、ホージャ・ジャハーンはホージャ・アブド・アッラーにとって伯父にあたる。

50) ruḥṣat. D126 は RVḤŠT と綴るが、Or. 9660, fol. 119b; Or. 9662, fol. 136b の RḤŠT による。

して去りゆくであろう。神が望むならば、**[p. 209]**⁵¹⁾ [このカーフィルの手から] 救出されよう。もし、我々が救出されるならば、そなたたちに何ら危害を及ぼし得ない。もし、我々皆がこのようにこの [カーフィルの] 群れの手落ちるならば、一人の者を [決して]⁵²⁾ 生き残さない。[この約束を守らないカーフィルたちのクルアーンの誓いを信用すべきではない]⁵³⁾。私はこの言葉を死から逃げて言うのではない。今、私には全世界の王権よりも死のほうがよい。第一に、我々の子孫は世から絶えないだろう。第二に、この悪事を働く圧制者たちの手において卑しく死ぬよりも矢の先で死ぬことに、私は満足である」と言った。

[対句

そなたが憎しみの剣で私を百に分割しても、私は満足である

邪悪な敵対者たちの嘲笑に、私は満足しない)⁵⁴⁾

さて、ホージャ・ジャハーン・ホージャム猊下は次のように言った。「おお、子たちよ、そなたのこの言葉は全て理にかなっている。しかし、天に救済策を求めることは、賢明な者たちのする仕事ではない。そなたたちは宙ぶらりんの運命について語っている。それ [運命] から逃げることは正当である。しかし、これは絶対的な運命である。それに服従し満足する以外に救済策はない。神に称賛あれ。殉教の遺産を我々に割り当てるように。カルバラーの荒野における殉教の階は最後の時に我々に割り当てられた。この世は無駄である。そこの幸福も一時的である。信仰の一条件は、現世の仕事よりも来世の仕事を優先することである。この世は信心深い者たちの牢獄、カーフィルたちの果樹園である。瞬時の願望を選択すれば、来世の安らぎと平静や、天女、美男子の敬意、尊重の分け前は得られないだろう。生命を持ついかなる者も死のシャーベットを飲まないでは **[p. 210]** おられない。我々に、今日 [死の順番が] あるならば、また別の者に [も] ある。しかし、このような死はいかなる時にも可能にならない。そなたたちは安らぎ、喜びを明日、最後の審判の日を知る。我々がこの敵の手においてどれほど圧制、迫害により卑しく死ぬとしても、その報酬はそれよりも多いのである。もう一つの面と

51) 原本の fol. 105 と fol. 107 の紙葉が逆に装丁されているようで、頁番号 (p. 209) と紙葉の番号 (fol. 107a) が誤って対応している (紙葉の番号付けの誤り)。それゆえ、頁番号のみを記す。

52) hargiz. Or. 9660, fol. 119b による補遺。

53) Bu bad-‘ahd kāfirlarniñ qasam-i Qurāniğa bāvar qilguluq emäs. Or. 9660, fol. 119b; Or. 9662, fol. 136b による補遺。

54) Bayt. Tığ-i kīn birlā meni yüz pāra qılsañ rāđi men, rāđi emäs men aña kim şūm raqīblar ta‘niğä. Or. 9662, fol. 137a; Cf. Or. 9660, fol. 119b-120a による補遺。ただし、Or. 9662 は ta‘niğä を T‘NYKA, Or. 9660 は DVRYKH と綴るが、A グループ写本 (Turk d. 20, fol. 156b; D191, fol. 168b; ms. 3357, fol. 224a) の T‘NYKA / T‘N KH / T‘NY KA による。

して⁵⁵⁾、災難に耐えるならば、至高なる神はその耐える者たちを友とする。おお、我が子たちよ、今、戦闘から手を引け。宿命がペンにおいてこのようである運命から何が生じようとも、我々はそれを見るであろう」と言って慰めた。王子たちは泣き嘆きながら、「おお、偉大なる父祖よ、今、運命から何が生じようとも、我々は首を差し出す。この敵たちからどのような事が我々の頭上に生じようとも、我々は同意する」と申し上げた。

この乱闘、戦いにより敵たちは河を渡った。ラフマーン・クリ・ベグ、クルグズのアブド・アッラー・ベグ、サリグ・ヤサーウル、幾人かの首領たちが集まり、ホージャ・ジャハーン・ホージャムの御前に来て敬意を表し、以前の理になかった〔言葉を〕⁵⁶⁾ 再び申し上げた。ホージャム猊下はこのペテン師たちの策略を知りつつ、仕方なく承諾した。次のように言った。すなわち、「おお、人びとよ、我々はそなたたちの手に捕らわれてしまった。今や、**[p. 211]** 選択権はそなたたちのものである。そなたたちがどのように⁵⁷⁾ しようとも、我々は運命に同意している」と言って言葉を尽くした。この者たちは次のように申し上げた。すなわち、「我々の言葉は信用されないでいる。ヤフヤー・ホージャム猊下⁵⁸⁾ がホージャ・ブルハーン・アッディーン猊下の口から言葉を聞いて戻ってくるならば〔よいでしょう〕。他の人はふさわしくない」とごまかし欺き、懇願した。ホージャム猊下は許可を与える以外に策を見いだせなかった。仕方なく受諾して、ホージャ・ヤフヤーを呼びだし、祝福された額に接吻し、「行け。そなたをまず神に、第二に我が父祖ムハンマド、神の使徒様に委ねた」と言って許可を与えた。ヤフヤー・ホージャム猊下は一団の王子たちと抱擁しあって (dast bagal körüşüp) 互いに同意を求め、泣き嘆きながら、密集した敵のあいだに入って行った。

さて、このムスリムたちの大部分は河で溺れ、服が濡れていた。日が暮れた。皆は大きく火を焚き、服を乾かそう⁵⁹⁾ とした。一部の者たちは乗っていた馬を屠殺し、その肉を焼いて妻子たち⁶⁰⁾ とともに食事をしていた。ホージャ・アブド・アッラー・ホージャム猊下は、王子たちのうち四人の者がおらず、その二人は偉大な人たち (‘azīmlarī) の出であり、その二人は小さな家族の出であり、殉教 **[p. 212]** したのかは分らない、ということを知ることになった。軍の首領に次のように言った。すなわち、「そなたたちが我々を大虐殺するのならば、

55) *yenä bir wajhī* (<YNH BR VJHY)。読みと意味は確実ではない。

56) D126 は *ma‘qūllarīnī* と記すが、Or. 9660, fol. 120b の *ma‘qūl sözlärini* により補う。

57) D126 は *har* と記すが、Or. 9660, fol. 121a; Or. 9662, fol. 138a の *har nečük* により補う。

58) ホージャ・ヤフヤーはホージャ・ジャハーンの子ホージャ・アブド・アッラーの息子である (本書 **[p. 65/ fol. 33a]** 「日本語訳注 (3)」44頁)。

59) *qurutgālī*。D126 は *ḤVRTQALY* と綴るが、Or. 9660, fol. 121b; Or. 9662, fol. 138b の *QVRTGALY* による。

60) *ahl ‘iyāllarī*。D126 は *ahl awlādī* と記すが、Or. 9662, fol. 138b による。

そなたたちは我々全員を集合させて殺す。我々は座視して⁶¹⁾ 妻子を、見知らぬ者の手に捕らわれるのに同意しない。先ず我々を始末すれば、そのあと何とでもなろう (andīn ne bolsa šul bolgay)。我々は一つの人生である。我々はそれに我慢できない。魂の力がある。我々は戦いあって死ぬ」と言って脅した (siyāsat qıldılar)。压制者の首領たちはその時、大天幕から大天幕へと探っていく、クルグズたちの手に落ちた者を見つけ、王子たちに渡した。ムスリムたちはこの夜も、悲しみと嘆き、心痛、悲哀とともに過ごした。

さて、敵たちは喜んで周辺を包囲して休んでいた。生命のある者は誰も、通るための道を見出さない。夜半が過ぎた時であった。ホージャ・アブド・アッラー・ホージャム・ナザル・ホージャ、サービル・ケレクヤラグの息子トゥーフタ・ホージャ、シハーブ・アッディーン⁶²⁾・ブカーウルの息子ミールザー・ハイダルの手を引いて、ホージャム猊下の御前に連れてきた。次のように申し上げた。すなわち、「おお、偉大なる父よ、サイイドの子孫たちに、幾人かの者が退去の許可⁶³⁾を求めた。受け入れられなかった。この三人の子供に退去の許可が与えられるならば、どうなりましょう。たとえ我々の子孫が絶えても、我々の【p. 213】父祖たちのハリーファたちの子孫が世から滅びなければ、我々みなに祈願するならば〔よいでしょう〕」と言って懇願した。ホージャムはこの懇願を理にかなったものとみなし、彼らのために祈願し、「私は我が祖先、ムハンマド猊下、神の使徒にまかせた」と言って、退去の許可を与えた。ホージャム・ナザル・ホージャはこの二人の子供を、一人を前に一人を後ろに乗せ、一頭の馬で避難した。さて、このカーフィルたちはいくらか包囲して休んでいた。しかし、この敵の眼に、至高なる神は埃をあげさせた。ホージャムの祈願はその天恵 (barakāt) に決して飽き足りなかった。

さて、この王子たちはこの厳しい夜を多くの苦難とともに過ごした。翌朝、敵の首領たちが来て、「おお、王子たちよ、今や、ここから移動して、城市のほうへ優雅に歩むならば、ホージャ・ブルハーン・アッディーン・ホージャム猊下に面会するならば、どの城市を与えられても、そこに腰を据えるならば〔よいでしょう〕」と申し上げた。しかし、王子たちは心の中で「そなたたちは我々をいかなる卑劣さや、いかなる責苦でもって連れて行くのか」と言っていた。致し方ない。戻ることになった。〔敵の首領たちは〕さらに言った。「武器装備は、今そなたたちに用はない。我々に渡すならば、我々が持って行けば〔よかろう〕」と言って騙し、所持品、武器装備を【p. 214】奪った。

61) qarap turup. D126 は QRALAB TVRVB と綴るが、Or. 9662, fol. 138b の QRAB TVRVB による。

62) Šihāb al-Dīn. D126 は ŠABDVN と綴るが、Or. 9660, fol. 122a; Or. 9662, fol. 139a の ŠHAB ALDYN による。

63) ruḥṣat. D126 は RVHŠT と綴るが、Or. 9660, fol. 122a; Or. 9662, fol. 139a の RHŠT による。以下、この語の綴りの異同について注記しない。

王子たちは仕方なく後ろに戻る旅の決意を固めた。午後の礼拝になるまで道を進んで、アク・タム (Āq Tām) という村 (kānt⁶⁴⁾) に下馬した。しかし敵たち⁶⁵⁾ は、「罪人に近づく者は誰であれ、その者も罪人[となる]」とお触れを出していた。そのため、誰にも彼らの世話をする勇気がない。王子たちはこの⁶⁶⁾ 宿場 (manzil) に下馬して泊まった。彼らには食べる⁶⁷⁾ 食糧も、火を焚く薪⁶⁸⁾ も [なく]、ひもじさが増し、寒さがつのる。特に⁶⁹⁾、幼い妻子は泣き悲しんで耐えられない。敵たちの司令官に人を遣わし、「これは何という迫害であるか。カーフィルたちの習慣でも幼い子を殺すことは正当と認められない」と言って、激しく非難したのち、中くらの袋の水、二本の若いグミの木の枝を持ってきた。王子たちがいかに火打金を打ち合わせ吹いても⁷⁰⁾、全く点火しない。苦勞して火をつけても⁷¹⁾、乾いた削りくず (otgač)⁷²⁾ がなく、点火しない。一、二頭の馬を屠殺し焼肉にして食べようと⁷³⁾ そのように努めたが、結局だめだった。仕方なく、至高なる神に嘆いて、寒さとひもじさに辛抱していた。この夜を [p. 215 / fol. 108a] 過ごした。早朝に軍の司令官が来て、不作法にも移動させ、あるもの一切合切を取り、肥えた馬を取り、痩せた馬に乗せ連れて行った。

さて、ムンキ・クルグズ (Mūnkī Qirgīz) が、最後の審判 [の大騒動] が明らかになったほど略奪した。敵のクルグズは、「罪人たちを最初に捕らえた人が我々となるならば、略奪物を他の者が取るのか [いや、取ることにはならない]」と言って、誰にも配慮せず強奪していた。このムスリムたちには、言った何かを与えないで耐えている力はない。時々祝福された頭から [ターバンを]、時々足から [靴を]、時々服を脱がせ取って、決して容赦しなかった。このような寒さで凍えてしまうとは言わなかった。時々母の胸から子供を取り出し、槍で突き刺し⁷⁴⁾ 放り投げている。誰をも区別しないでいる。まさにこの苦難、責苦を受けつつ午後の礼拝まで

64) Or. 9660, fol. 122b; Or. 9662, fol. 139b は mawđi' と記す。

65) dušmanlar. D126; Or. 9660, fol. 122b; Or. 9662, fol. 139b は DVŠMNLAR と綴る。以下、この語の綴りの異同について注記しない。

66) bu. D126 は BR と綴るが、Or. 9660, fol. 122b; Or. 9662, fol. 139b の BV による。

67) ġazā qilġay. D126; Or. 9660, fol. 122b は ġazā を ĠZA と綴る。

68) otun. D126 は ot と記すが、Or. 9660, fol. 122b による。

69) 'alā al- ħušūš. D126 は 'LY ALĤDVŠ と綴るが、Or. 9660, fol. 122b; Or. 9662, fol. 139b の 'LY ALĤŠVŠ による。

70) fūdādīlār. D126 は FVRDYLR と綴るが、Or. 9662, fol. 140a の FVDADYLAR による。

71) aldursalar. D126 は AVLDVRSHLAR. Or. 9660, fol. 123a は ĀLDVRSYLAR と綴る。

72) otgač (ot-qach) について、Robert Barkley Shaw, *A Sketch of the Turki Language as Spoken in Eastern Turkistan (Kāshghar and Yarkand)*, Part 2: Vocabulary, Turki-English, Calcutta, 1880, p. 17 に詳しい説明がある。

73) yemäkkä. D126 は YRKH と綴るが、Or. 9660, fol. 123a の YMAK KH による。

74) sanjip. D126 は SAV YYB と綴るが、Or. 9660, fol. 123b; Or. 9662, fol. 140b の SANJYB による。

道を進み、オルダの上に新しく建てた屋敷（ハウリ）に下馬させた。その扉を人の背丈〔の高さ〕にしていたらしい。その上部を隠さないでいたらしい。内部に財をしまっていたらしい。王子たちはそれぞれ自分の属人たちとともに落ち着くよう地面を清めて、それぞれの席を占めた。〔ここにも、食べるものは何もない。このように三昼夜、何も与えなかった。ひもじく惨めなまま横になった。敵たちの兵は水、食物を口にする。互いに喜び合う〕⁷⁵⁾。ここでも、以前より何百倍もの苦難を与えた。ホージャ・ジャハーン・[p. 216 / fol. 108b] ホージャム陛下に、托鉢僧用の毛皮のコート (farajī juba) があった。あるタグリクが「毛皮のコートを与えるならば」と言った。ホージャムは毛皮のコートを脱ぎ捨てた。食べる食料も、着る衣服も、燃やす薪もあるうか。一部の者たちは短い上着⁷⁶⁾ だけで、一部の者たちはシャツだけであった。幼い妻子たちの泣きうめく声に耐えられないでいる。胸が痛み、非常に悲しんだ。多くの難儀、苦難とともに夜を明かした。早朝、このならず者たちは再び〔王子たちを〕⁷⁷⁾ 城市に移動させ連れて入ることになった。タグリクたちは「我々が各人を別々に連れて入る」と言って、離れさせ分けた。この王子たちが二度と会うことは可能にならなかった。これ以上、記し聞かせる力は〔私には〕ない⁷⁸⁾。

詩

酌人よ、そなたの酒杯を私にもっと早く持ってこい

このような言葉によりよく陶酔するために

残りの言葉を記す力は私にはない

私は啞者である。説明する舌は私にはない

新妙な状態が私に向かっている

私の舌に言葉への力は残らなかった

私の眼から涙が一滴一滴と止まらなかった

75) munda ham yemäkkä hīč nārsä yoq. Bu ʔarīqada üç kečä kündüz hīč nārsä bermädilär. Ač zār yattılar. Dušmanlar laškari āb ʔaʔām yedürlär. Hvuš- ḥälliḡ qīlašīdurlar. Or. 9660, fol. 123b による補遺。

76) nīmča. D126 は NMČH と綴るが、Or. 9662, fol. 140b の NYMJH による。

77) Šahzādalarñi. Or. 9660, fol. 124a による補遺。

78) Or. 9660, fol. 124a は「これ以上、言葉を記す力はない」(mundīn ziyāda sözlärñi fütümäkkä ʔaqat yoq), Or. 9662, fol. 141a は「これ以上、記す力は私にはない」(mundīn ziyāda fütürgä ʔaqatim yoq dur) と記す。この文のすぐ後に、Or. 9662, fol. 141a では「完了」(Tamām) と記されている。同じく Or. 9660, fol. 124a では、「誰にも聞く力がないとて言葉を簡潔にした。神が正しく最もよく知り給う。命令により(?)。神の助力により書き終えた。完了した」(İšitmäkkä hīč kišidä quwwat yoq dep sözni muḥtašar qıldılar. Wa Allāh aʔlam bi-al-šawāb. Bi-ḥukm (?). Kitāb tamām tammat tamām bi-ʔawn al-malik wahhāb (sic). Tamām šud.) と記されている。

胸の谷にあった石が痛んだ⁷⁹⁾
ペンは泣いて胸を引き裂きもした
それでまた、ページの表面が湿った
[p. 217 / fol. 109a] このような圧制は過ぎ去ってしまったのか
かくのごとき迫害をカーフィルはするのか
この邪悪で無知な者が暗闇にしている
世界に灯をともしないままにいる
この王たちが預言者の子孫であるならば
指導者の王冠が人類のためであるならば
カーフィルたちの民をたたき、温厚であるな
イスラームの剣を公然とふるい
聖法（シャリーア）の戒律を広めるならば
カーフィルたちから王座、王冠を取り
礼拝、断食と巡礼、救貧税
かれらはその時に名声を得た
全ての知識人はその時に栄誉を得て
詩人となり、その手に新奇な敬意
真実は正義において無比である
アヌーシールワーンにとって正義は誹謗となり
知識ある民は彼らより裕福でない
気前のよい人⁸⁰⁾はこの者たちの前でけちである
この言葉について意図は説明されていない
太陽を説明する必要はない
[p. 218 / fol. 109b] 意図は次のとおり。このような王たちに
真実の秘密を知っている者たちに
圧迫、圧制を加えることは許されるのか
このように虐げることは罰なのか
成熟した者、未熟な者、乳飲み子
か弱い女性、婦人たちは数えきれない

79) gudāz oldī. D126 は gudāz を KZAR と綴るが、Or. 9660, fol. 124a; Or. 9662, fol. 141a の KDAZ による。

80) hātam. D126 は ḤATM と綴るが、Or. 9662, fol. 141b の ḤATM による。

カーフィルもムスリムも容赦しなかった
良いことも悪いことも理解しなかった
これらの事は完全に⁸¹⁾ 錯誤である
おお人々よ、醜悪はこれから過ぎ去らない
[私のような黒い顔の者（不名誉な者）に好意を示せ
話をするときに理解させ、短くせよ]⁸²⁾
私は尊師たちの出来事を説明した
その大きな不運、災厄の哀悼を
弟子と信奉者のなかに多くの叫び声
それより、私は世間に動揺、騒動を起こさせよう
襟を引き裂きつつ⁸³⁾、その胸を痛める
この不運から頭に土を撒き
良き祈願とともに記憶し
尊師たちの靈魂を喜ばせ
現世の終わりにおいてカルバラーについて
しるしを知らせた。そのような百の災難について
[p. 219 / fol. 110a] 現世の初めから終わりまで
アダムの子孫に、誰にも来ていない
おお神よ、この時から最後の審判まで
アダムの子孫のもとからこの辛苦を取りたまえ
この不運が彼らとともに終わりますように
この災難から世界の人びとが救われますように
おお誠実な者（サーディク）よ、来い。そなたの言葉を完了せよ
完了した。火曜日に書くことが⁸⁴⁾
人が日付について問うならば

81) *bī-kam-u-kās*. D126 は BY KM KAS と綴るが、Or. 9660, fol. 125a では KM の上に u を示す短母音符号の *ḍamma* が付されている。ただし、*bī-kam-u-kās* を *bī-kam-u-kāst* の訛りとみなした。

82) *Meniṅdek rū siyahğa qıl ‘ināyat. Suḥan äylärdä ber fahm u qaşarat*. Or. 9660, fol. 125a; Cf. Or. 9662, fol. 141b による補遺。

83) *čäk etbän*. D126 は *etbän* を *AYTYBAN* と綴るが、Or. 9660, fol. 125a; Or. 9662, fol. 142a の *AYTBAN* による。

84) *Tamām oldī se-šanba kün kitābat*. Or. 9660, fol. 125a は「完了した。この書くことの全てが」(*Tamām oldī ki bu jam‘-i kitābat*.)、Or. 9662, fol. 142a は「完了した。金曜日、書くことが」(*Tamām oldī ki azīna kitābat*.) と記す。

年は千二百三十五であった⁸⁵⁾

[1行空白]⁸⁶⁾

もしこの写本の持ち主⁸⁷⁾を問うならば

この世においてこのような善良な人を

その名はカラन्दル・ホージャ (Qalandar Ḥvāja) である

勇敢さにおいてまるでハイダル・ホージャ⁸⁸⁾のよう

寛大さにおいてまるで最後の預言者のようである

寛大の仕事は彼で最後になる

公正さにおいてアヌーシールワーンのごとし

敬虔さにより指導者たちの長

85) 「人が日付について問うならば 年は千二百三十五であった」の詩句は Or. 9660, fol. 125a; Or. 9662, fol. 142a には記されていない。なお、ヒジュラ暦 1235 年は西暦 1819-20 年である。この紀年は次注で触れるように『タズキラ・イ・ホージャガーン』の著作年ではなく、写本の書写(作成)年であるとみなされる。

86) この 1 行空白の左欄外に「これ以後もマナヴィー詩がこのように書かれている。まるで別の筆跡であるかのように」と記されている。この書き込みは D126 写本を作成した書写人(サンクトペテルブルグ大学東洋学部教員 Mulla Khusain Feizkhanov)によってなされたと考えられる(L. V. Dmitrieva, S. N. Muratov, *Opisanie tyurkskikh rukopisei Instituta vostokovedeniya*, vol. 2, Moskva: Glavnaya redaktsiya vostochnoi literatury Izdatel'stva "Nauka", 1975, p. 65 参照)。このマナヴィー詩 10 行は本ページ(p. 219)の終わり(写本の終わり)まで続く。Or. 9660, fol. 125a-b; Or. 9662, fol. 142a-143a には、このマナヴィー詩はなく、別の詩句が記載されている。Or. 9660 写本はその詩句で終わっており、次葉(fol. 126)からはバスマラとともに別作品のタズキラが書き始められている。Or. 9662, fol. 143a はその詩句に続けて、「完了した。[1行空白] 次のことが隠され述べられないままにならないように。すなわち、千二百四十五年、ヤルカンドの数えでヘビ年、神聖なラマダーン月の二十六日、水曜日に書き終えた」(Tammat tamām. Maḥfi vā nā-madkūr qalmağay kim ta'rīḥqa miñ iki yüz qırq beş Yārkañd ḥisābida yılan yılı māh-i šarīf Ramāzān (sic) ayniñ yigirmā altāsi čahār-šanba küni fütüp tamām bolğan.)と記す。なお、ヒジュラ暦 1245 年ラマダーン月 26 日は西暦 1830 年 3 月 21 日である。この年月日は Or. 9662 写本が作成された日とみなされる。他方、Or. 9660 写本の末尾(fol. 184a)に次のような記載がある。すなわち、「神の援けにより完了した。[4行の詩句省略] 千三百十一年、イヌ年、神聖なラマダーン月の二十日、水曜日に書き終えた」(Tammat tamām bi-'awn al-malik al-wahhāb. ... Ta'rīḥqa miñ üç yüz on bir sag yılı māh-i šarīf Ramađāñniñ yigirmāsi čahār-šanba küni yazıp tamām bolğan.)。ヒジュラ暦 1311 年ラマダーン月 20 日は西暦 1894 年 3 月 27 日である。Or. 9660 写本は fol. 1a-125b の『タズキラ・イ・ホージャガーン』の後に、ホージャ・ジャハーンギール、アルスラーン・ハーンなどの関する韻文の作品を載せている(fol. 126a-183b)。それゆえ、写本末尾のヒジュラ暦 1311 年ラマダーン月 20 日は Or. 9660 写本の書写(作成)日であると判断される。

87) šāḥib-i maktüb. Dmitrieva と Muratov の訳語(vladelets rukopis')による(L. V. Dmitrieva, S. N. Muratov, *Opisanie tyurkskikh rukopisei Instituta vostokovedeniya*, vol. 2, p.64)。

88) Ḥaydar Ḥōja. 第4代正統カリフのアリーを指していると考えられる。

昼夜立っていて断食する

このようにその心は穏やかである

その仕事はつねに神を想起することであった

真実の旅程において叡智であった

おお我が兄弟よ、この我が言葉は効果的である

来い、来い、さらに自分の聞き手となれ

これらの言葉は結局、稀有の真珠である

心配しないでするならば、満腹する

そなたに相応しいようにこの言葉を私は語った

そなたは神の御前に目をこらす

そなたの信念は写本 (maktüb) にある

我が王子たちはそなたの友である⁸⁹⁾

89) マスナヴィー詩 10 行はここで終わるが、このページの左上の欄外に次のような詩句の書き込みがある。おそらくこれも D126 写本を作成した書写人によるものであろう。すなわち、「さらに欄外にこのように書かれていた。

おお神よ、時と場所を恵み与えよ

このタズキラ (伝記) をムハンマド・アミーン (Muḥammad Amīn) は書き

最後の審判の日にこの王子たちは

左右において監視の役となるだろう

書写 (kitābat) の日付を私が自身 (ḥurd) に問うたのであれば

知識のゆえに、良き日付 1235 と書いた」。

この詩句に挙げられているムハンマド・アミーンはタズキラの作者ではなく、ヒジュラ暦 1235 年に書写して写本を作成した人であると考えられる (L. V. Dmitrieva, S. N. Muratov, *Opisanie tyurkskikh rukopisei Instituta vostokovedeniya*, vol. 2, p.65 参照)。

